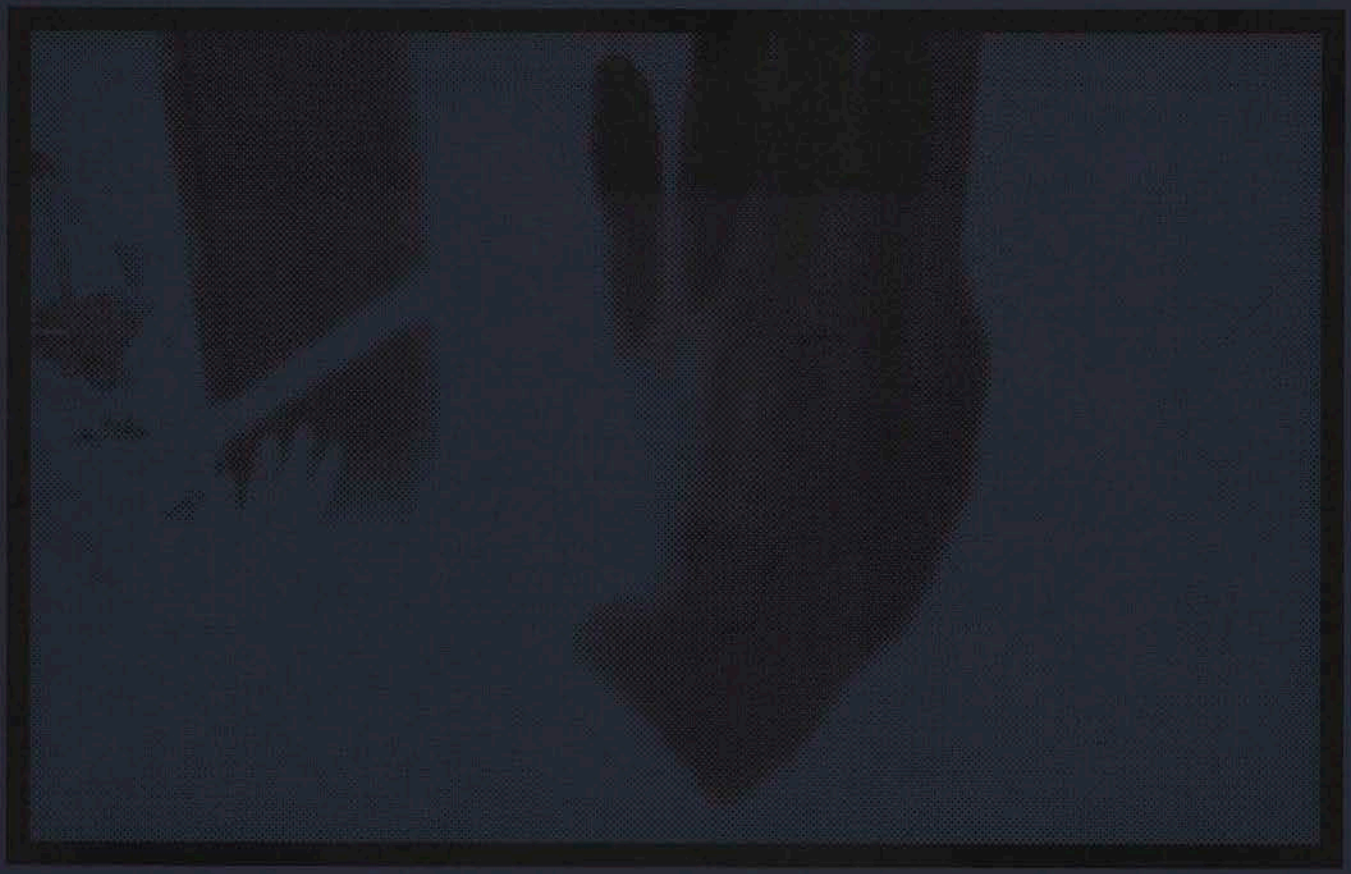
Hi/Hi

安原千夏

技法：シルクスクリーン，用紙：プライク-FS，インク：アクアセル，サイズ：21×29.7 cm



作品について

安原千夏

表面が特殊コーティングされた紙にシルクスクリーンで印刷した。できるだけ紙の色に近づけたインクは、光が当たるとソラリゼーションのような効果によってネガポジ反転し明るい色に変化する。そこには手の図像が浮かび上がる。

右手にカメラを構え、自身の左手を撮影した。印刷されている図像はそのときのカラー写真を加工したものである。

窓から日光が差し込んでいた。光が左手を照らし、その影が映った。二つの左手が写ったその写真はいい写真だと思った。一人の人間の二つの左手から成るその写真は、セルフィー的で合わせ鏡のようにも見えた。影の左手は亡霊のような頼りなさでたった今ここに現れ、窓の光を隔て二つの手が出会った瞬間かのようだ。二つの手にはそれぞれの時間が流れていて、この瞬間では静止した二つの時間がトンネルのようにつながり、行ったり来たりすることができるとでもいうような感じだ。

写真は時間や空間を内包してストーリーを誘発した。このような想像にフォーカスするため、出力される図像はより平面的にすることによって、時間／空間の奥行きと対比させようと思った。

シルクスクリーンで印刷する工程としてまず版を作る。光の反応によって固まる感光乳剤を塗った布にポジフィルムを密着させ、紫外線を当てる。ポジフィルムの白いところは青緑色に感光され、黒いところは元々の布の色（白）になり、版はネガポジ反転したようなカラーリングになる。版の白いところに暗い色のインクが通り、印刷された図像はまたネガポジ反転する。そして紙の上に光が当たることでさらにネガポジ反転する。この像の反復する現れ方が、撮影した写真で感じた時間／空間の奥行きを感じさせるのに適していると思った。

とは言いつつも、前で述べたシルクスクリーンの工程に関することは、鑑賞の助けにならなくてもいいし、過剰な要素になることも避けたい。重要だと思うのは、そこには繰り返し反転する工程が確かにあったという事実があることだ。

表面的には光が当たることで色が変わり、見え方が変わる。「何かがある」という不確かなイメージから「これが見える」というような具体的なイメージに変化する。この認識の変化には時間が生じ、一番奥にある景色を立ち上がらせる。事実が表面にボリュームを与える。

浮かび上がった二つの左手の関係を想像する。

窓のようなフレーミングで紙の上に配置され、何かのワンシーンのようだ。

リラックスして眺めるうちに、そういえばあの時あの場所はどこだったか、たしか…。あの話は誰から聞いたのだったか、ええと…。

そんなふうにして気づけば何か別のことを考えているかもしれない。